

## コリント人への手紙 第12章 4節

「さて、賜物はいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。」

分裂や分派で混乱する共同体に語ることはである。自分にはこれがあり、他者には無いと見下すようなことが起こっていた。逆に誰かにはあれがあるけど自分には無いと劣等感を抱く者がいた。優越感にしても劣等感、いずれにしても自分を見失う横並びの視線である。どちらにも平安は無く、感情の浮き沈みが続く。

それにもかかわらず横目線の共同体があり、初めの集うことの意味を失ってしまうことがある。ひかれて集まってきたはずなのに、初めの求心力が見失われ、自分たちの思いが先行し、やがて各自の思いが煮詰まってしまう。もはや共同体の求心力どころか反発力が強くなってしまう。横目線で自分たちのあるべき姿を失いつつある共同体に語る。

共同体を構成している者たちにはそれぞれの賜物があります。それぞれが異なった賜物があります。集う人々それぞれに異なった種類の賜物があります。異なりを語り、互いの賜物の比較は語られません。それぞれが与えられた賜物を用いることが大切です。なぜかと言えば、賜物をあたえるのは御霊だからです。御霊はひとつです。横を見るのではなく、御霊に生かされることに満たされるだけでよいのです。

2023年6月16日